

「イエスがゲネサレト湖畔に立っておられると、神の言葉を聞こうとして、群衆がその周りに押し寄せて来た。2 イエスは、二そうの舟が岸にあるのを御覧になった。漁師たちは、舟から上がって網を洗っていた。3 そこでイエスは、そのうちの一そうであるシモンの持ち舟に乗り、岸から少し漕ぎ出すようにお頼みになった。そして、腰を下ろして舟から群衆に教え始められた。4 話し終わったとき、シモンに、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい」と言われた。5 シモンは、「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょ」と答えた。6 そして、漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった。7 そこで、もう一そうの舟にいる仲間に合図して、来て手を貸してくれるように頼んだ。彼らは来て、二そうの舟を魚でいっぱいにしたので、舟は沈みそうになった。8 これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言った。9 とれた魚にシモンも一緒にいた者も皆驚いたからである。10 シモンの仲間、ゼベダイの子のヤコブもヨハネも同様だった。すると、イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」11 そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。」

【説教】

今日の聖書の言葉は、イエスさまに最初に弟子入りした人たちのことが記されています。シモン、ヤコブ、ヨハネといった名前が上がっていますが、特にシモン・ペトロを中心にイエスさまの弟子のことが記されています。この話は弟子たちがイエスさまと出会う、それまでの生活が大きく変わっていくということが特徴的だと思います。それまで魚を捕る漁師だった人々が、今度は人間をとる漁師に変わって行きます。その大きな変化を起こしたのは、イエスさまの教えに従うことで起こった奇跡的な大漁の出来事でした。経験豊かな漁師であったペトロたちでさえも手に負えない湖の状況でした。しかしイエスさまのもたらす神の言葉は、そのような難しい状況であっても、返っていつもよりたくさんの魚を獲得することをもたらすことに成功いたしました。つまり神の言葉というのは、生活を豊かにすることにも用いることができるのだとここで言おうとしているのだと考えられます。ただ、ペテロたちは神の言葉をそれまでの魚を捕る漁だけに用いることから身を引いてしまいます。これだけの大量をもたらす力を持つものです。これを続けて行って一攫千金を狙ってもよかったですでしょう。どうして彼らは生活の仕方を変えていったのでしょうか。

その理由として次のようなことが挙げられると思います。魚もそしてそれを売って得られるお金も、いつかはなくなってしまう。いくら魚を食べてもお腹はまた空きます。お金をいくら稼いでも、ずっと自分がそれを持つ続けることはできません。このルカによる福音書にはこのような譬えがあります。財産を持っている人が、それまでの倉を壊してより大きな倉庫を立て直します。そしてその新しい倉庫に、たくさんの財産や食べ物を蓄えます。さあこれから食べたり飲んだりして楽しもうと思っている矢先に、寿命が尽きて死んでしまいます。このあなたが用意した物は、一体誰のものになるのかと言われるという話です。

このイエスさまの譬え話に象徴されていますように、お金も物もいつまでも残るものではありません。それだ

けでは決して人を芯の根っこのところから満たすことはできないのです。これは、お金や物が不要ないということではありません。それらを補って、返ってお金や物の真の価値を引き出すような、そういった何かが必要なのではないかとということです。ペトロたち最初の弟子たちは、イエスさまと出会ってそのことに気がついたということです。

ペトロたちがイエスさまを通して出会ったのは、「聖なるもの」でありました。5節のところを見てもらいたいのですが、そこではまだペトロはイエスさまのことを「先生」と呼んでいました。しかし奇跡的な大漁の出来事を目の当たりにし、8節のところではイエスさまのことを「主」と呼んでいます。この場合「主」というのは、主なる神のみなざる力に覆われているということを表しています。この聖なるものとの出会いこそ、私たち人間を真に活かし命を生き返らせてくれるものです。聖なるものは、私たちを「永遠なるもの」につなげてくれます。私たち人間はどんなに忘れようとしたところで、心の奥底の無意識のところでは衰えて消えていくことを憂い、おびえています。永遠に続いて行く命に繋がらない限り、この憂いから逃れる術はありません。そして聖なるものは、私たちを「全体なるもの」とつなげてくれます。私たちは人間にとって、最も恐れることは、独りぼちになること、居場所がどこにもないということでしょう。その恐れを癒す唯一の方法は、自分が全体の中の一つとして繋がっているという感覚であります。全てのものが私と繋がっており、私は大きな神の生かしている命の中の一つなのだという思いが、私たちを孤独から回復させてくれるのです。

このような聖なるものと繋がることこそが、私たちの生活を本当の意味で豊かなものにしてくれます。しかし私たち人間は、この聖なるものを憧れると同時に、それを嫌い、逃げようとする恐れをも持っていることがこのイエスさまへの弟子入りの話からわかることです。ペトロはここでイエスさまのことを「主よ」と、呼びかけました。しかし同時にその聖なるイエスという存在から離れようといたします。「主よ、私から離れてください私は罪深いものなのです。」(8 節) そうペトロは、聖なるものとの大きく隔たった距離を感じずにはおられませんでした。この距離の隔たりは、ペトロだけでなく人間ならだれしも、感じるころであるでしょう。「永遠なんていうことはどうでも良くて、今楽しければそれで良い」という思いが私たちはあるのではないのでしょうか。「全体とか他の人とかそんなのもどうでもいい、自分が良ければそれでいいんだ。」そう思ってしまうところもやはりあると思います。私たちには聖なるものを追い求める方向と、そこから逃げたい向かう方向が心の中に同居してるのですね。

しかし、このことをそのまま放っておくと、避けたい、逃れたいという思いの方が勝ってしまいます。そうすると、人間というのは自ら衰え、滅んで行く方向にどんどん向かってしまいます。父なる神さまがイエスさまをこの地上に派遣したのは、その滅びに向かわせる人間の罪深さから救い出すためです。私たちは聖なるものとの繋がりを抜きにしてお金や物を求めてしまいますと、私たちの生活をとても危険な状態に晒してしまいます。ですので、主なるイエスはなんとかその危険から救いだそうと私たちの前に現れてくれます。しかし私た

ち人間は、ペトロと同じように恐れの方が大きくなりますので、せつかくの主イエスの現れから離れようとしてしまいます。そこでイエスさまはこう言うのです。10 節のところですがこうあります。「**恐れることはない**」と。これが、イエスさまの役割です。私たち人間から恐れを取り除いて聖なるものと結びつくことが出来るように、私たちの気持ちを支えて励ましてくれるために、この世界に來られたというわけです。

イエスさまはご自分といっしょになって、この怖さを取り除く人々を募るために弟子たちを招かれていたのです。イエスさまによって恐れを取り除かれた弟子たちは、後から続いてくる人々のために今度は自分たちがその役割を担います。イエスさまの弟子たちは、自分たちがそうしてもらったように、人々の気持ちを支えて何とかして聖なるものへの怖さを取り除いて行くことのためにその働きを集中させます。例えば、こういう人がいたとします。「自分のようなまともなことをしてこなかった人間は、今さら教会の門をくぐるなんてことはおこがましくて出来ません。」そう言われたとします。そうしたらこう答えるわけです。「いやいや私なんて礼拝に行くたびに教会の門をくぐっていますけど、たいしてまともな事は今も出来ていません。10 回のうちほんの 2、3 回でもできれば、上出来だと思っているんですよ。」そう言って励ませば良いと思います。

またこうも言われたとします。「聖書には完全なものになりなさいという言葉がありますね。私はああいう言葉を聞きますと自分なんかとても完全になれないから、やっぱり自分には無理なんだと思うのです。」皆さんならなんて答えるでしょうか。こう答えれば良いと思います。「聖書の言っている完全な物っていうのはこういうことだと思います。テストで言えば 100 点満点中 20 点か 30 点しか取れないとします。いくらがんばっても点数は上がらない。その時、人間だったらみんな笑うと思います。おまえは馬鹿だなと。しかし神さまは笑いません。自分の持てる力で 20 点 30 点しか取れなかったら、それをちゃんと認めてくれるのです。そしてそこから 1 点でも 2 点でも上がれば、それをとても喜んでくれます。もし 40 点でもとろうものなら、一番上等な葡萄酒を開けて、お祝いしてくれます。そうやって足りないところは、ちゃんと神さまが赦してくれることで埋めてくれます。それでめでたく完全になるということですね。」そう言えば良いと思います。

イエスさまの弟子になるということは、恐れ戸惑う人々の付添人になるということです。ちょうどマラソンでは目が見えない人に伴走者がつきます。暗闇の世界を走るには横に寄り添い、その人の目となって走る人が必要です。一人では到底走れない 42.195km の距離です。次は左に曲がります。次は右です。ここからは登り坂です。我慢して頑張っていきましょう。後もう少しで坂が終わりますよ。そう声をかける人のおかげで最後まで走り通すことができるのです。

またイエスさまの弟子たちを、山登りのガイドにも譬えることが出来ます。聖なる山に登るには、経験のない人は一人では登れません。自分なりの経験からアドバイスをしてくれるガイドが必要です。「この天候なら今日はやめときましょう。今はゆっくり休んで体力を蓄える時です。登ることさえあきらめなければ、誰でもこの山に登ることは出来ますよ。ですから、あせらず道中を私と一緒に楽しみましょう。」そういつて声をかけてくれる

同伴者のおかげで不安なく頂上まで登って行くことができます。

聖なる山の頂から見える景色は格別です。「この山を登って来て本当に良かったです。こんな景色が見られるなんて、生まれてきて良かった。今日まで生きていて本当に良かったです！」と心から喜ぶ人々の姿が、ガイドが受け取る報酬です。「そうです、この景色を自分だけ見るのは申し訳ないと思い、一人でも多くの人に見てもらいたかったんですよ。だから、私はガイドになったのです。」というわけです。

イエスさまの弟子になるということ。それは聖なるマラソンの伴走者になるということであり、聖なる山登りのガイドになるということです。それは伴走者自身が共に楽しむためであり、実はこのガイドの役割を担うことが一番聖なるものと深く結びつくことをもたらしてくれるのですね。一人で先を行くのではなくて、二人以上でなるべく多くの人たちと一緒に、ゆっくりでも良いですからその道を行くことが数十倍の喜びを得ることをもたらしてくれます。このことを、今日の聖書の言葉から共に聴くことが出来ればと願います。